

# 幼児の語彙習得

## —動詞用法のオノマトペ習得研究における問題点—

筑波大学非常勤講師 / 東邦大学非常勤講師  
五十嵐 啓太

### I. はじめに

幼児の言語習得では、形式によって習得の容易さが異なるとされている。例えば、三歳児は名詞に比べ、動詞を習得することが困難であると実験によって示されている (cf. Imai et al. (2005))。しかしながら、事はそれほど単純ではないようである。Imai et al. (2008) は、同じ範疇に属する形式でもタイプによって習得の容易さが異なると主張した。上述の通り、三歳児は動詞の習得が困難であるが、Imai et al.によると、現実世界の声や音、様態を模写するオノマトペから成る動詞 (例:「バンバンする」「ペタペタする」) の習得は通常の動詞 (例:「歩く」「投げる」) に比べて習得が容易であるという。Imai et al.の研究は、大変示唆的であるものの、その分析には根本的な問題があると考えられる。具体的に、本稿では、Imai et al.が実験に用いた動詞用法のオノマトペを通常の動詞と平行的に扱うことが適切でないことを指摘したい。

### II. Imai et al. (2008)の主張と問題点

日本語はオノマトペが発達した言語であると言える。オノマトペは、現実世界の声や音、様態を模写している語であり、伝統的に擬声語・擬音語・擬態語と呼ばれてきたものにおおよそ対応する。例えば、以下のようなものである。

- (1) ゲラゲラ、ニャー、バシッ、ドンドン、ソワソワ、ベタベタ etc.

(1)の「ゲラゲラ」は現実世界での笑い声を模写したオノマトペであり、「ソワソワ」であれば、不安からくる落ち着きのなさという様態を模写している。オノマトペは、従来、言語の恣意性の問題との関係でしばしば取り上げられてきた (cf. Hamano (1998), 田守・スコウラップ (1999))。一般に、音と意味の結びつきに必然性はないという言語の恣意性が仮定されている。しかし、オノマトペにおいては、それらの間にある程度の相関関係、すな

わち、音象徴的關係が認められると考えられている。例えば「ごろ」「ぐら」「ぼた」と「ころ」「くら」「ぼた」の対立に見られるように、有声子音から始まる語は大きなかたまりを、無声子音から始まる語は小さなかたまりを表し、音と意味の間に一定の關係が認められるとされている（例は Imai et al. (2008: 55)からの引用；音象徴については Hamano (1998)を参照）。

Imai et al. (2008)は、こうした音象徴が幼児の言語習得の助けになることを示すため、三歳児を対象に、オノマトペを含む動詞と、音象徴が関わらない通常の動詞では習得に差があるかをテストした。1章でも述べた通り、三歳児は新しく学習した動詞を一般化し、その動詞を違う場面で適切に用いることが難しい。もし三歳児が音象徴的でない通常の動詞よりも、オノマトペを含んだ動詞を学習しやすいのであれば、音象徴が幼児の語彙習得の助けになっていると考えることが出来るわけである。

Imai et al. (2008)の実験では、実際には日本語に存在しない動詞が用いられている（例えば「のすのすする」（オノマトペ）や「ちもる」（音象徴が関わらない通常の動詞））。こうしたはじめて学ぶ動詞をどの程度正確に一般化して理解することができるかという実験を行った（詳細は Imai et al. (2008)を参照）。結果的に、被験者であった三歳児は、音象徴的でない通常の動詞よりも、オノマトペを含んだ動詞の意味をより正確に一般化し理解することが出来ることがわかった。このことから、Imai et al.は音象徴が幼児の動詞学習の助けになると結論付けている。

Imai et al. (2008)の分析は、一見すると、通常の動詞とオノマトペを含む動詞の相違を説得的な形で示しているように思われる。しかしながら、Imai et al.には根本的な問題が存在していると考えられる。まず、そもそも、動詞的に用いられるオノマトペと通常の動詞を平行的に扱うことができないという形式的な問題点がある。3章で論じるように、動詞用法のオノマトペは「ドンドンする」として一つの語彙になっているのではなく、「ドンドン」と「する」から成る句としてのステータスを持っているとされている(cf. 影山 (1993), Kageyama (2007))。「歩く」のような通常の動詞が単一の語彙であることを考えると、形式的に二つは平行的でないことがわかる。また、意味的な問題点も考えられる。4章で論じるが、オノマトペはそれ自体で出来事・状態を表す(cf. Kita (1997))。Imai et al.では、動画に写っている行為者の行為を動詞的なオノマトペ（「のすのすする」など）で描写する実験が行われたが、オノマトペが本来的に出来事・状態を表すのであれば、幼児は「のすのすする」という表現全体を理解せず、オノマトペの部分（「のすのす」）のみを理解して、動画に写っている行為者の行為を把握している可能性が考えられる。この可能性は、幼児が犯すオノマトペの誤用からも示唆される。そのため、意味的に見ても、動詞用法のオノマトペと通常の動詞を比較することは適切でないということになる。こうした形式的・意味的問題点から、音象徴と動詞の習得に関する研究としては、動詞用法のオノマトペを分析している限り、不十分であると言わざるを得ない。以下では、具体的に、形式的・意味

的問題点を見ていきたい。

### III. 形式的特徴

はじめに、動詞用法のオノマトペの形式的特徴について考えてみたい。ここでは、影山 (1993)、Kageyama (2007)の分析を紹介しながら、「動名詞+する」(以下「動名詞 (verbal noun)」は VN と呼ぶ) という複合動詞との比較を通して、動詞用法のオノマトペが動詞という単一の語ではなく、句の形式をしていることを示す。結果的に、通常の動詞と形式的に平行して論じることが出来ないと結論付けたい。

まず、「VN する」について考えてみたい。影山 (1993)によると、「VN する」という複合動詞は一つの語を形成している。このことは、等位構造における削除テストから示される。(2)の例を考えてみたい。ここでは「VN する」として「旅行する」「登山する」が問題になっている。

- (2) a. 夏休みには、兄は海外に旅行し、弟は富士山に登山した。  
b. \*兄は海外に旅行、弟は富士山に登山した。

(影山 (1993: 261))

(2a)に示されているように、「旅行する」と「登山する」を等位接続する場合、前半の「旅行し」の「し」を残す必要があり、(2b)のように「し」を削除し、単に VN 部分だけを等位接続することはできない。これは、「旅行する」には形態的な緊密性があり、一つの語であることを示唆している。この点は「旅行をする」「登山をする」のように「を」が介在し、句としての特徴を持つ形式と比べるとより一層はっきりとする。(3)に示した通り、この形式の場合、「旅行をし」の「し」を削除することが可能である。

- (3) 夏休みには、兄は海外に旅行を(し)、弟は富士山に登山をした。 (cf. (2))

(3)との比較から、(2)で用いられている「旅行する」「登山する」という複合動詞は単一の語であることがわかる。

このことを念頭に、「VN する」複合動詞と表面上類似した形式を持つ動詞用法のオノマトペを考えてみたい。影山 (1993: 261)で示されている通り、この用法のオノマトペでは、等位接続された前半部のオノマトペから「し」を削除することができる。

- (4) 頭はズキズキ(し)、心臓はドキドキした。 (修正あり)

(4)では「ズキズキする」と「ドキドキする」という動詞用法のオノマトペが問題になっている。前半部に位置する「ズキズキし」から「し」を削除しても全く問題がない。このことから、影山 (1993)、Kageyama (2007)は、「旅行する」や「登山する」とは異なり、動詞用法のオノマトペは単一の語ではなく、句であると結論付けている。さらに、「ズキズキとする」や「ドキドキとする」のように引用の助詞「と」が介在した形式と比べてみたい。(5)に示すように、この形式でも等位接続の前半部「ズキズキとし」の「し」を削除することができる。

(5) 頭はズキズキと(し)、心臓はドキドキとした。 (cf. (4))

(4)と(5)の文法的な平行性から、「ズキズキする」といった動詞用法のオノマトペには、目に見えない「と」が介在し、オノマトペ部分が引用的になっている句を形成していると言えそうである。

以上の議論を前提にすると、Imai et al. (2008)で行われた実験に反し、動詞用法のオノマトペと「歩く」「投げる」といった単一の語である通常の動詞は平行的に扱うことが出来ないと言える。音象徴が動詞習得の助けになる点を論じるには、より慎重に形式面を考慮する必要があると考えられる。

#### IV. 意味的特徴

続いて、動詞用法のオノマトペの意味的特徴について考えてみたい。ここでは、特に、Imai et al. (2008)で被験者となった幼児は「オノマトペ+する」全体ではなく、オノマトペ部分のみを理解している可能性を指摘する。

オノマトペには様々な種類があるが、たいていの場合、出来事や状態を表すとされている (cf. Kita (1997))。この点は、オノマトペを英語で説明する際の説明文からもよくわかる。以下の例を考えてみよう。

- (6) a. ぬるぬる ‘tactile sensation caused by a slimy object’  
b. バーン ‘intensive collision of heavy objects’  
c. すらすら ‘a sequence of actions without hesitations’  
d. そわそわ ‘restlessness due to anxiety before an important event’  
(Kita (1997: 381-382))

(6a)「ぬるぬる」は、Kita (1997)の英訳が示している通り、何らかの物に引き起こされた感覚的な状態についてのオノマトペと言える。(6b)「バーン」は、英訳が示す通り、音を引

き起こす出来事（この場合、衝突）が問題になっている。さらに、(6c)「すらすら」では音を伴わない行為が、(6d)「そわそわ」では心理的状态が表されている。こうしたオノマトペの意味的特徴は以下の例でより一層はっきりとする。

- (7) a. バリバリバリーッ。近所に雷が落ちたようだ。  
b. ドッカーン。近所のガソリンスタンドが爆発したようだ。  
c. どろどろどろどろどろーっ。お化け屋敷から不気味な太鼓の音が聞こえる。
- (田守・スコウラップ (1999: 85))

(7)では、オノマトペが単独で用いられている。そして、オノマトペで表現された出来事が、後述の文によって説明されている。例えば、(7a)では「バリバリバリーッ」というオノマトペによって何らかの音をき起こす出来事が生じたことが読み取れる。どのような出来事が生じたのかが、後続文「近所に雷が落ちたようだ」によって説明されている。このように、ある出来事を表現するためにオノマトペは単独で用いられ得るのである。

ここで、前章の議論を思い出していただきたい。「ズキズキする」といった動詞用法のオノマトペは、全体が句としての構造を持っており、さらに「ズキズキ」の部分が引用構造になっていると考えられる。本章で論じてきたように、「ズキズキ」といったオノマトペはそれ自体で出来事・状態を表すため、動詞用法のオノマトペでは引用構造となっているオノマトペ部分のみで、問題としている出来事・状態を表すことができると言える。そのため、Imai et al. (2008)で被験者となった幼児は、問題となっている出来事を、動詞用法のオノマトペ全体ではなく、引用構造になっているオノマトペ部分のみで理解している可能性があると考えられる。つまり、「のすのすする」では、動画に映し出された行為者の行為を「のすのす」とのみ結びつけて理解している可能性があるということだ。この可能性は、幼児の誤用からも支持されるように思われる。Tsujiura (2005)は、野地 (1973-1977)のデータから以下のような幼児の誤用を提示している（解釈を助けるために、Tsujiura が与えている英訳を一緒に載せてある）。

- (8) a. とんとんた(あ) [1;11]  
‘I hit it’ (after hitting a tile)  
b. ぱちんたよ [2;1]  
‘(it) bursted’ (describing the firewood bursting)
- (Tsujiura (2005: 376))

発話した年齢が1歳と2歳であり、Imai et al. (2008)で対象とした幼児の年齢とは異なるが、この誤用は示唆的である。(8a)では、「とんとん」というオノマトペに過去形形態素「た」

が直接付加している。本来であれば「とんとんした」という形式を用いなければならない。同様に、(8b)では、「ぱちん」に「た」が直接付いており、正しくは「ぱちんした」になるはずである。Tsujiura は、(8)で示した以外にも、複数類例を指摘しており、オノマトペに「た」を直接付ける文法が、問題となっている幼児の中で一貫性のある規則として定着していることがうかがえる。この事実は、まさにこの幼児がオノマトペ自体を一種の動詞のように認識していることを示唆していると考えられる。オノマトペ自体が出来事・状態を表し、その出来事・状態が過去に生じたものであることを表すために、過去形形態素「た」をオノマトペに直接付加しているのではないだろうか。

このように、Imai et al. (2008)で被験者となった幼児は動詞用法のオノマトペ全体ではなく、オノマトペの部分のみで、提示された出来事を理解している可能性がある。Imai et al.の実験では、必ずしも「のすのすする」全体を幼児が理解したとは結論づけることができないため、通常の動詞よりも、動詞用法のオノマトペのほうが習得しやすい理由は、必ずしも Imai et al.が意図したものであるとは言い切れないのではないであろうか。

## V. まとめ

Imai et al. (2008)では、動詞用法のオノマトペは、音象徴を含まない通常の動詞よりも幼児の習得が容易であることが指摘された。これは、音象徴が動詞習得の助けになることを示している。Imai et al.の分析は大変示唆的であるが、その分析、とりわけ動詞用法のオノマトペの扱いに問題があると言える。「ズキズキする」「ドンドンする」といった動詞用法のオノマトペは、一つの語ではなく句であり、単一の語である通常の動詞とは形式的に異なる。また、オノマトペは、それ自体で出来事や状態を表すため、「ズキズキする」「ドンドンする」全体ではなく、「ズキズキ」「ドンドン」の部分のみで問題となっている状態・出来事を理解することができる。こうしたことから、動詞用法のオノマトペを、通常の動詞と比較することは困難であり、音象徴が動詞習得の助けになるという点を証明するためには、動詞用法のオノマトペ以外に頼る必要があると考えられる。

## 文献

Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*, Kuroio, Tokyo.

Imai, Mutsumi, Etsuko Haryu, and Hiroyuki Okada (2005) "Mapping Novel Nouns and Verbs onto Dynamic Action Events: Are Verb Meanings Easier to Learn than Noun Meanings for Japanese Children?," *Child Development* 76, 340-355.

Imai, Mutsumi, Sotaro Kita, Miho Nagumo, and Hiroyuki Okada (2008) "Sound Symbolism Facilitates Early Verb Learning," *Cognition* 109, 54-65.

影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房、東京。

- Kaheyama, Taro (2007) "Explorations in the Conceptual Semantics of Mimetic Verbs," *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, ed. by Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani, and John C. Smith, 25-82, Kurosio, Tokyo.
- Kita, Sotaro (1997) "Two-Dimensional Semantic Analysis of Japanese Mimetics," *Linguistics* 35, 379-415.
- 野地潤家 (1975-1977) 『幼児期の言語生活の実態』文化評論出版, 広島.
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペー形態と意味一』くろしお出版, 東京.
- Tsujimura, Natsuko (2005) "Mimetic Verbs and Innovative Verbs in the Acquisition of Japanese," *Proceedings of the Thirty-First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 371-382, Berkley Linguistic Society.